

## 目次

### 果樹農業の動向

- ・ペルー、チリ、米国の生食用ブドウの輸出動向 1
- ・課題にたくましく対応するミシガン州の果樹園 3

### 現地報告

- フランス 5

### トピックス

- ・メキシコのアボカド戦略は米国、カナダ、日本を重視 6
- ・ペルー ブルーベリーの輸出が新記録 7
- ・FAO 世界の2022年の熱帯果実輸出量は5%減少 7
- ・南アフリカ 政府が柑橘類セクターを支援 7
- ・ニュージーランド アジア市場に向かう今シーズンのリンゴ 7



## 果樹農業の動向



### ペルー、チリ、米国の生食用ブドウの輸出動向

#### 1. ペルーがチリを抜いて南米トップのブドウ輸出国に FreshPlaza (2023年4月3日)

ペルーのブドウのシーズンが終わりに近づいている。世界的な青果物供給業者であるバンガード・インターナショナル社のディルク・ウインケルマン氏は、「イカ県にある弊社の農場では約3週間前に収穫を完了した」と語る。収穫期間が終了しても、販売はさらに数か月間続くとして、同氏は「今後数週間にわたって引き続き北米とアジアに弊社の荷が到着する」と付け加えた。(以下「」は同氏の発言)

今シーズンの総出荷量は7,000万箱強であった。「7,300万箱が収穫されると予測されていたので、その数量をわずかに下回っている。」しかしながら、昨年と比較して、ペルーでは出荷量の9~10%の増加がみられる。当初の予測からの減少は、主に悪天候やストライキによる果実の損失が原因である。ストライキはペルーのアグリビジネス部門に悪影響を及ぼした。「それは業界のあらゆる分野—資材から労働、農作業、物流、積込みスケジュール、市場への輸送時間まで—でドミノ効果を生み出した。ペルーでストライキが起こったとき、北部のピウラ県は基本的に収穫を完了しており、イカ県が最も大きな影響を受けることになった。」

#### ペルー対チリ

バンガードペルー社の自社農場での生食用ブドウの出荷量は、全国的な増加と一致している。「昨年

に比べて出荷量が12~13%増加しており、これは当社の予想と一致している。弊社が最近新植した樹が成木化し、その結果、増産に結び付いた。」2022/23年度は、ペルーが初めて南米でトップの生食用ブドウ輸出国としてチリを追い抜いたため、ペルーの生食用ブドウ産業にとって大きな節目となる。「ペルーは積極的に新しい品種を植えてきており、それがペルーの主な差別化要因となっている。ペルーで新植した園地は成園化し始めている。これに対して、チリの従来品種の出荷量は減少しており、同国はさまざまな理由により新しい品種の植え付けが遅れている。チリでは、すべての新品種は強制的な検疫プログラムに登録しなければならない。これにより、ペルーの成長地域と比較して、権利の保護された新しい品種への転換を遅らせる障害になっている。」

#### 大多数は新品種

ペルーのブドウの品種構成を詳しく見ると、新品種は総出荷量の約68%を占めている。同国は、他のほとんどの国よりも早く新品種を植えて成園化することに常に対応できていた。また、新品種の新植にもより積極的に取り組んできています。

「全体として、ペルーは新品種の総生産量で主導権を握っている。」ウインケルマン氏は、まずは緑色系ブドウへの力強い動きをみており、次いで赤ブドウ、黒ブドウが続く。主な緑色系品種には、ア

イボリー™、スイートグローブ™、オータムクリスプ®が含まれ、アリソン™、スウィートセレブレーション™、ジャックスサルト™が主要な赤ブドウ品種である。黒ブドウの場合、主な品種はスウィートフェイス™とミッドナイトビューティー®である。

### 世界への輸出

バンガードペルー社の生食用ブドウは世界中に出荷されている。「弊社の生食用ブドウの大部分が米国、カナダ、メキシコに出荷されており、北米で確固たる地位を確立している。またアジア、主に中国、韓国、台湾、タイ、ベトナムに出荷されている。」さらに、同社は中南米諸国や英国でも同様の快適で安定した顧客向けサービスを提供している。「弊社は欧州市場にも進出しており、この収穫期が終わったら、欧州大陸での販売プログラムの拡大に力を入れるつもりだ。また、新しい検疫手続きにより来シーズンの日本への出荷が可能になることにも期待している。弊社の新品种への取組みと成功は、業界のリーダーとしての競争上の優位性確保に大いに貢献している。」

マリーケ・ヘムズ

## 2. チリ産生食用ブドウの輸出は今シーズン減少の予測 FreshFruitProtal(2023年3月9日)(一部省略)

チリは現在、生食用ブドウの世界の主要輸出国である。その主要輸出市場は米国であり、2021/22年度に総輸出量の49%を占め、極東が22%、欧州が17%と続く。

チリの果実輸出業者協会(ASOEX)の生食用ブドウ部会は、チリ中央地域での生食用ブドウの出荷可能量の減少を反映して、2022/23年度の6回目の予測を発表した。同予測によると、輸出は6,451万8,065箱(8.2kg/箱、52万9千トン相当)で、前のシーズンに比べて13.2%減少し、前月の第5回予測よりも4%減少した。

この減少にもかかわらず、ASOEXのイバン・マランビオ会長は、チリの輸出の54%が新品种由来のものであることを指摘した。今回の予測では、新品种生食用ブドウの輸出が3,478万8,400箱であるのに対して、従来品種が1,859万1,491箱、レッドグローブ種が1,113万8,173箱と予測している。

ASOEXのマーケティング部長で生食用ブドウ部会のコーディネーターであるイグナシオ・カバレロ氏によると、輸出量の減少は主に気候問題によるチリ中央地域の減少によるものであるとして、「北米とアジアはチリ産生食用ブドウの主要市場であり、全出荷量の約80%が集中している。今回の新たな輸出予測によって、特にペルー産生食用ブドウの輸出遅延により大量のものが米国向けに出荷されていることを考慮したとき、米国市場への(過剰輸出による)圧力を軽減し、他の市場への多様化が進むことを願っている」と今回の予測で述べた。

過去数年間は、悪天候や物流上の問題などにより、チリの生食用ブドウ事業は課題を多く抱えていた。ディバインフレーバー社のマイケル・デュピュイ氏は、「その結果として、今年はチリの生産者にとって正念場であ

り、彼らが未だに優れた生食用ブドウを提供できることを示す機会である」と主張する。

同社のアントニオ・エスコバル氏は、「チリは検疫要件のため、新しい品種への転換が遅れている」として、「正確な数に言及するのは難しいが、北米市場にはまだかなりの数の伝統的な品種が輸出されている」と主張する。

もう一つの課題は、他国の生食用ブドウ生産地域との重複である。同氏は、「チリは毎年魅力的な市場への輸出機会を失っている。世界的に生食用ブドウの供給過剰があり、チリの生産は他の多くのブドウ生産国と重複している」と述べた。第一に、チリ産の販売シーズンの始まりは、北米市場の大部分を占めるペルー産と重なっている。チリ産の販売シーズンの終わりに、メキシコ産がすでに市場に出回っており、米国に近い。さらにその上、欧州への輸出に焦点を当てている国である南アフリカ産と収穫時期が完全に重複している。

チリの隣国ペルーは、新品种のより大きな栽培面積を有するという利点があるだけでなく、生食用ブドウを燻蒸なしで米国に輸出することができる。エスコバル氏は、「チリは現在、果実を燻蒸なしで米国に輸出できるようにするためシステムアプローチを推進している。これは、到着時の果実の品質を向上させるため、チリの生食用ブドウにとって重要になるであろう。この環境下で優位に立つ唯一の方法は、最高の品質と風味の生食用ブドウを生産することである。どちらも非常に優れたものでなければならず、チリの生産者はこれをよく理解している」と語る。

今回のASOEX生食用ブドウ部会の予測によると、北米には3,591万9,879箱の生食用ブドウが輸出されるのに対して、アジアには1,383万8,353箱と欧州向け916万5,309箱を上回っている。今シーズンの生食用ブドウの出荷は第7週から第12週にピークに達すると予想されている。

同部会によると、チリは2023年の第8週までに2,390万3,222箱の生食用ブドウを輸出し、昨シーズンの同週と比較して17%増加した。しかしながら、この増加は、前シーズンにおける大幅な出荷遅延により前シーズン輸出分が後ろ倒しになったためである。

## 3. 米国カリフォルニア州はアジアへのブドウの輸出を再開できるか FreshPlaza(2023年3月22日)

2022年はカリフォルニア州産生食用ブドウの輸出にとって困難なシーズンだったと言えるだろう。プリティレディ・ブドウ園のニック・ドゥルチヒ氏は「インフレも進んだが、より大きな影響があったのは、ドルがとてつもなく高くなり、それが我々の産品を海外の市場で極めて高価にしたことだ」と言う。インドネシア、ベトナム、台湾、マレーシア、フィリピンなどの国々は、かつてカリフォルニア産ブドウの大口輸入国であったが、購入量を減らした。同氏は、「ドル高は我々の輸出に悪影響を及ぼした」と述べた。(以下「」は同氏の発言)

それだけではない。中国の生食用ブドウ生産量が増加しており、その余剰分がすべての環太平洋市場



に自由貿易協定による低価格で流入している。「我々の競争相手は、すべてのアジア諸国と自由貿易協定を結んでいる。これにより、カリフォルニア州はすでに縮小している市場で大きな不利益を被る。」カリフォルニア州産ブドウのもうひとつの輸入国である韓国は現在、シャインマスカットを自ら栽培しており、シーズン終了後も数か月は十分な供給がある。

「さらに、輸送費が大幅に上昇した。以前は1箱当たり4ドルであったが、昨シーズンは6ドルであった。」カリフォルニア州の生産者にとってもう一つの不利な点は人件費である。「我々は、州の北部では15ドル、州内の一部地域では20ドル近い最低賃金を払っている。」さらに、生食用ブドウの生産は世界中で大幅に増加している。「中国、スペイン、ブラジル、ペルー、オーストラリア、ナミビア、南アフリカ、エジプトはすべて生食用ブドウを栽培しており、このリストはどんどん増えている。」これらすべての結果として、カリフォルニア州の競争上の優位性は減少し、輸出は大幅に減少した。

### 極端な暑さと記録的な降雨量

ドゥルチツヒ氏は、これらすべてのことにもかかわらず、天候が許せば輸出市場に自信があると言う。「昨年の夏は猛暑に対処しなければならず、中生の緑色ブドウが台無しになった。」これまでで最も暑い夏で、ブドウは梱包時には良好に見えたが、数週間の海上輸送の後には良い状態で荷が届かなかった。この冬、カリフォルニア州では記録的な降雨と記録的な降雪が見られ、状況は好転した。ベーカーズフィールド地域では9インチの雨が降り、もう一つの主産地であるフレズノ地域では17インチ近くの降雨があった。これは通常の冬の少なくとも2倍の量である。「水のおか

げでブドウの木は必要な栄養素を取り入れ、大変素晴らしい発芽となった。」同社のブドウ園は、はるばるシエラネバダ山脈のチャイナピークから流れてくる雪解け水を利用している。まだ雨と雪が降るので、次のシーズンに向けての状況は有望なようだ。

### 輸出機会

「良い果実があり、ドル高がそれほど極端でなければ、輸出市場は大きな可能性がある。品質を重視するかどうかは栽培者次第であり、その観点から、ドゥルチツヒ氏いくつかの変更を加えた。「黒ブドウは海外で人気を失っており、一部の大型スーパーマーケットでは取り扱いをやめた。これを受けて、種なし黒ブドウの栽培面積を減らし、権利関係のある緑色ブドウと特別な香りのする権利関係のある赤ブドウ品種に置き換えることを決めた。これらのサンワールド社(種苗会社)の品種は輸出市場で成功すると信じている。」

輸出に役立つ可能性が高いもうひとつのことは、中国でのコロナ関係の規制の解除である。「これによって誰もが自由に移動できるようになる。一部の卸売業者は、今シーズン再びカリフォルニア州産ブドウを取り寄せることを楽しみにしていると聞いているので、物事が再開することを期待したい。」

輸出は常に同社の売り上げの大きな部分を占めており、中国の顧客が取引を再開するのを助けるために、ドゥルチツヒ氏は経験のあるスタッフを雇った。「彼は業界で15年以上の経験があり、輸出が彼の主要業務になる。彼は今週の月曜日、3月20日に弊社で働き始めた。出荷を再開する上で彼が重要な役割を果たすと確信している。『意志があるところには道がある』」

執筆者: マリーケ・ヘムズ

## 課題にたくましく対応するミシガン州の果樹園

Good Fruit Grower (2023年4月1日)

国際果樹協会(IFTA)は、2月にミシガン州グランドラピッズで第66回大会と見学ツアーを開催した。ここでは、ミシガン州の果樹園が、いかにして困難に対する対応力を強化し、将来の直面する課題に適応しているかを垣間見た。

シカゴとデトロイトの間にあるグランラピッズ市周辺地域には、ミシガン州における大半のリンゴ果樹園、選果場、販売部門がある。この地域には、8,900haを超えるリンゴ園があり、州の生果用果実の約80%を生産している。IFTAのバス見学ツアーは、グランドラピッズの北にある長さ35.4km、幅12.9kmのフルーツリッジとして知られるなだらかな丘が続く地域を集中して回った。西方40kmにあるミシガン湖の影響で、フルーツリッジはリンゴ栽培に特に適する気候条件となっていると語るのは、バレント社の持続性に関する課題担当の販売スペシャリストであり、前ミシガン州立大学の普及教育員であるエイミー・アイリッシュブrawn氏である。

ツアー参加者は4つの果樹園に立ち寄った。すべ

での園が、山積する産業界の課題に対して、それぞれの生産規模やターゲットとする市場に合わせて、いろいろな方法で適応していた。

リバリッジ・プロデューサー・マーケティング社(以下、リバリッジ社)は州最大のリンゴ出荷業者であり、今や最大手の生産者の一つでもある。同社は、事業の多様化を継続して行っている垂直統合型企業である。最初の見学先は、グループ企業であるリバリッジ・サイダー社のリンゴ果汁加工施設であり、1日に最大18万9千リットルの果汁を搾汁でき、果汁は全米50州で販売されている。同社は、地元生産者からの果汁用リンゴを原料とすることを第一としており、もしミシガン州が不作の場合は米国内の他州から調達すると、法人営業担当のRJシモンズ氏は語った。

グラント地区にあるリバリッジ社の園地で、一行はV字トレリス樹形のリンゴと雨よけされたサクランゴを見学した。管理責任者のジャスティン・フィンクラー氏によれば見学したリンゴ樹は、アズテックフジとプレミアハニークリスピーであり、それぞれの栽植距離は列間3.7m

一樹間0.9mと、列間3.7m-樹間0.6mで、それぞれ台木はM.9-337、M.29である。

フィンクラー氏によれば、リバリッジ社のV字仕立ては、おそらくミシガン州で唯一であり、均一で機械化しやすくなっているという。樹体結束、仕立て、せん定等は高所作業台車で行われ、収穫も高所作業台車で行う方向で進めている。

V字仕立ての初期投資額は大きいですが、同社はやりくりしながら進めており、樹体生育もよい。同氏によれば、今後、リンゴの植栽法は、V字トレリスになるという。

V字トレリスのリンゴ樹の真向かいには、V字トレリス樹形の生食用サクランボがドイツのボーエン・カバーリング・システムズ社製のネットで覆われているのが見えた。サクランボ樹はギセラ5台のスキナーで2018年の定植であった。フィンクラー氏によれば、ネットは、雨による裂果を防ぐのが目的であるが、霜害を軽減し受精向上の効果もあるとのことである。

同氏は、「この地域でサクランボを生産する全生産者にとって、雨が最大の問題である。ここ10年で最高の作柄でも、雨が30分降れば、すべてが失われる」と語った。

ミシガン州立大学の園芸学教室でサクランボの専門家であるグレッグ・ラング教授によれば、V字仕立ての幅の狭い平面的な樹形は光の透過を多くすることができ、曇天の多い米国中西部や東部で雨よけサクランボを栽培するためには欠かせないという。

ボーエン社のネット被覆に要する支柱やトレリス、雨よけネット、設置の経費は、果樹園の配置や被覆機能によって異なるが、10a当たり6,200ドル～6,900ドルである。雨よけネットは、通常3年でもとがとれ、10年ほどは使えると、同社の販売責任者であるヤコブ・ファウスベル氏は語った。

一行は、リバリッジ社の認証有機リンゴ園についても見学した。品種はG.41台のMAIAI(エバークリスプとして販売)、G.41台とM.9-337台のアンブロージャである。有機リンゴの需要増に対応するため同社は、有機生産者であるカイル・ラッシュ氏と提携して取扱量を増やし、地元の小売業者に安定して供給できるようにしているとシモンズ氏は語った。

同氏は、「お客さんが来て地元の有機農産物を1週間見れば、翌週には、人数は多くはないが別の地域からお客さんが来るようになる」と述べた。

有機リンゴは、生果市場では慣行栽培のリンゴより25～30%高い値段がつく。加工用市場では2倍の価格になる。同氏は、「それが積もれば大きな額になる。そのためには、出荷可能な果実の割合を維持し、ある水準以上の出荷量となるようにする必要がある」と語った。

ラッシュ家族農園では、家族が協力してモモ園の近代化に向けて努力していた。ジェイク・ラッシュとニック・ラッシュの両氏は、IFTA一行に、労働力軽減、多収、品質向上を目指した、列方向にV字となる樹形と一般的な垂直V字樹形を案内した。

列方向V字樹形園は、標高300mを超える丘にあり、ここ周辺地域では最も標高の高い地点の一つであ

る。ペイリー台のベレールという品種のモモが、2020年に列間3.7m-樹間1.8mで植栽(主枝本数10a当たり298本)された。

ラング教授によれば、列方向V字樹形は、2本の主枝が列内に配置され、平面的で壁のように果実が着果するという。

ジェイク・ラッシュ氏によれば、列方向V字樹形は果実の大きさがより均一になり、労働力も軽減できる。その理由は収穫回数が8～9回から5～6回に少なくなるからであるという。

同氏は、「モモは、労働力こそ重要だ」と語った。

同氏によれば、新しい植物生育調整剤である摘花剤アクシード(Accede™)(有効成分ACC)を使えば、V字樹形の収穫回数を4～5回に減らすことができ、熟度がそろふことで一度に多くの果実を収穫できるという。

同氏は、「過去10年ほど、摘花用にコード式の摘花機械を利用してきたが、今ではアクシードを使って摘花することにワクワクしている」と述べた。

従来樹形の平均収穫量は、10a当たり1.6～2.0トンであり、V字仕立てとアクシードを使えば、品種にもよるが10a当たり2.2～2.7トンの収穫も期待できる。

一行は、2021年設立の民間研究企業であるLTI Agリサーチ社が所有する高密度植園でのせん定や台木試験の状況を見学した。同社の責任者であるタイ・ウィッテンバッハ氏によると、昨年8月に生産者であるピーター・ナイブラッド氏から32haの果樹園を購入したという。

LTI社は、生産者会員に向けて試験を行い、生産者会員は会費を払えば試験結果にアクセスできる権利を持つ。同社は、企業からの契約試験も行う。同社は、会員からの提案に常に耳を傾け、それが実用化に向けた試みを進めるのに役立つとウィッテンバッハ氏は語った。

エンゲレスマ家族農園では、先進的な高密度植リンゴ園と受賞歴のあるリンゴ果汁加工工場を見学した。案内したのはジム・エンゲレスマJr.氏と娘のブリジットさんである。1920年代からフルーツリッジで果樹を栽培しているエンゲレスマ家は、30.3haのリンゴ園があり、多くはドリップ灌水されている。27.5haは、トレリス仕立てのガラ、ハニークリスプ、アンブロージャ、ジョナゴールドで生食用である。残りの2.8haは、自然仕立てのガラ、ゴールドデンデリシャス、紅玉で、果汁加工用である。他に0.8haの生食用モモがある。

エンゲレスマさんのリンゴ小屋と呼ばれる加工工場は、ミシガン州のリンゴ果汁コンテストにおいて、8回の受賞という記録を誇る。加工工場は、9月から12月まで稼働し、1日に8,700リットルの果汁を製造する。果汁の多くは、グランラピッズ地域の産直市場や小売店で販売される。エンゲレスマ氏によれば、彼らの加工工場は、製品の多様化と効率的な技術の導入で強みを維持しているという。同氏は、「圃場での生育状況の詳細なモニタリングと加工過程への新技術導入により、生産量と品質の向上に向けて生産をきめ細かく管理できている」と語った。



## ●●● 現地報告

### フランス：衰退するリンゴ産業

フランス現地情報調査員 ジャンルイ・ラリュ

フランスは従来、農業大国として知られてきた。しかし、世界の食料貿易はますます活発になっているのに、フランスの農産物・食料品の輸出は伸び悩み、世界食料貿易に占める地位はこの20年間に第2位から第5位に下がってしまった。2022年9月28日、フランス上院の経済問題委員会はフランス農業の競争力の低下を取り上げた報告書を発表した。

報告書は、2017年以降の仏政府の農業政策の分析を試みていて、生鮮青果物についてトマトとリンゴの例を取り上げている。ここではリンゴについて紹介したい。

リンゴは従来、フランス農業の中でも優れた部門とみなされ、輸出も活発であった。

フランスの気候がリンゴ生産に適しているため、古くから、フランスの幅広い地域で多様なリンゴを生産してきた。複数の主要生産地がそれぞれの地域に合う品種を生産してきたことから、産地同士で競合する場合もあるが、補完し合うことも多く、気候や衛生上の全国的なリスクを避けてきた。ここ数十年の主要品種はゴールデンデリシャスやガラで、そのほかにも多様な品種があり、そのため幅広い価格が揃っていた。フランスはリンゴの生産だけでなく、その物流においても、経験を重ね、毎年生産量の30%が百以上の国に輸出されてきた。

ところが、世界のリンゴ生産量は1980年代と比べて2020年には2倍に増えているのに、フランスの生産量は1990年代の200万トン前後から2021年には150万トンに落ちている。

フランス産リンゴの輸出も縮小している。フランスのリンゴの輸出量は2004年から2015年頃までは60万トン程度あったが、2019年以降は25万トンのレベルに留まっている。リンゴの世界貿易が拡大している中で半減した。2021年には、他のEU諸国に対して輸入量が輸出量を超えるという考えられない事態になった。かつてはフランス産リンゴを毎年8万トン程度輸入していたアフリカでは、2015年以降、フランスからの輸入がほぼ皆無になった。中近東もフランスからの輸入量を大幅に減らしている。多くの国の輸入業者は、フランス産リンゴの品質が優れていることは認めても、価格が高すぎるとして敬遠している。その上、イタリアもアルジェリア(2016年以降)やエジプト(2022年)への輸出がなくなり、その分EU域内の競争はますます激しくなっている。生産量で世界3位のトルコは、EUの域外市場でも域内市場でも輸出を伸ばしている。

フランスの貿易収支は2016年には輸出超過額が4億2500万ユーロであったが、2020年には3億4000万ユーロで、量的な減少ほど激しくはない。価格が高いためであるが、量的減少をカバーするほどではない。フランス産リンゴの平均輸出価格はkg当たり1.18

ユーロで、イタリア産はそれよりも0.15ユーロ、ドイツ産は0.34ユーロ、ポーランド産及びトルコ産は0.52ユーロ低い。報告書には、「もしフランスが価格競争力を20%高めることができれば、輸出は40%伸びるだろう」という輸出業者の話が引用されている。

報告書は、こうしたフランス産リンゴの衰退の主な原因は労働コストの高さ、規制の複雑さ、厳しさなどにあるとしている。2021年の1時間当たりの労働コストを比較すると、フランスが12.18ユーロに対して、EU内でリンゴの最大生産国であるポーランドは4.80ユーロに過ぎない。ドイツ(9.50ユーロ)もイタリア(7.74ユーロ)もフランスと比べると低い。その上、フランスでは規制が多く、特に農薬に関する規制が他国よりも厳しい。EUの規則で使用が許可されている農薬は454あるのに、フランスでは309に過ぎない。フランスが独自に使用禁止を決めた農薬があるためである。「フランスで禁止されている農薬を使ったEUの他国のリンゴがフランス市場に自由に出回っていて、不公平だ」とフランス生産者は不満である。また、農薬散布地域や散布時間の制限も、他のEU諸国よりも厳しい。その他、フランスでは農家がしなければならない様々な行政手続きが煩雑で、時間がとられる。こうしたことから、面積あたりの収量は減少し(2010年の42トン/haに対し、2021年には35トン/ha)、生産コストも上がったため、生産者の所得が減ってきた。そうすると、後継者探しも難しく、リンゴ園を放棄するケースが増えて、生産面積も減る一方である。2021年のフランスのリンゴ生産面積は3万7,300haで、1992年の半分になった。この報告書が発表された当時、地方紙などは、フランスのリンゴ生産面積がここ10年間、毎日1.26ha消失しているとセンセーショナルに取り上げた。

生産者の収益を改善する策として、行政もリンゴの高級化(ピンクレディーなどのクラブ制品種\*)や有機栽培を推奨してきた。現在、フランスのリンゴ栽培面積の20%は有機栽培である。

\*最近、品種改良で作られた新品種のリンゴ(例えば、ピンクレディー、ジャス等)を、特定の組織が商標権の登録をして、生産、販売などの規定を定めて、それを遵守する生産者に生産を許可するケースが増えており、その組織が広範な宣伝なども担当する。このようなリンゴをクラブ制品種という。

しかし、一時は著しく伸びていた有機市場も、頭打ちになってきた。農薬規制が厳しいフランス産リンゴの方が安全だと思ふフランス消費者が多いものの、価格が輸入品と比べて高く、最近では、リンゴの購入量を減らす消費者が増えている。このままでは、フランスの一般消費者が手軽に買えるリンゴは輸入品だけになると危惧されている。

その他、フランスのリンゴ貿易の特徴として、加工用リンゴは多くを輸入に依存している。フランスはコンポー

ト生産ではリーダー的な存在であるが、フランス産では生食用リンゴの規格外のものを使っていて、シードル用以外には加工用のための栽培はあまり行われていない。

上院経済問題委員会はこの報告書で、リンゴ産業に関しては、政府も補助金などを出して支援してきた高級化・有機化は問題の解決に繋がっていないと判断している。

報告書は、農業全体の競争力を高めるために、次のような提案をしている。

代替策のない殺虫剤や殺菌剤などについて、支援措置を取らないのであれば、政府は使用禁止を決めないと約束する、規制の重複を避ける、つまり、EUの規制だけでなくフランスが独自にもっと厳しい規制をすることを止めるべきだとしている。このほか、季節労働者の社会保障費を下げ、労働コストを下げる、エネルギー問題に対応すべく農業・食品産業に対してエネルギーの特別価格などの措置を取って国内の食料主権を維持すること、世代交代の際の融資へのアクセスを容易にするために特別な条件の農業者預金制度を設置すること、気象変動に対応するために農家の体力を高める措置をとること、農産物・食料品の本当の産地が明確に分かるシステムを作ること、などを挙げている。

報告書の提案は、全体的に農業者の言い分に非常に近いもので、環境問題などに関して、今日の一般の世論に逆行すると思われるものもあり、発表当時、大手の全国紙がほとんど取り上げなかったのは、そのせいであろうかとも思われる。フランスの上院は元老院とも呼ばれ、直接選挙ではなく、国会議員や地方自治体(州、県、市町村)の首長や議員などが選ぶ議員で構成され、地方の声が国民議会(下院)より強く反映される傾向がある。

この報告書が発表された後も、食料品のインフレは一層激しくなっている。また、4月6日に、フランス国立食品・環境・労働衛生安全庁(ANSES)は、フランスの3分の1の地域の水道が殺菌剤クロロタロニルに汚染されていると発表して大騒ぎになった。クロロタロニルは国際がん研究機関(IARC)が「ヒトに対する発癌性がある可能性がある(グループ2B)」としていて、フランスでは、2019年にすでに使用が禁止されている。

国民の手の届く価格で食料を供給しながら、農業者に安定した生活を保障し、さらに環境保全を確保する政策が求められているわけで、まだまだ議論が続きそうである。

## トピックス

### 1. メキシコのアボカド戦略は米国、カナダ、日本を重視 FreshFruitProtal(2023年2月28日)(一部省略)

この記事では、サラ・イリヤスがアボカドズ・フロム・メキシコ(AFPM)社の戦略・販売コンサルタントであるミゲル A. バルセナス氏との独占インタビューで、メキシコ産アボカドの状況について尋ねている。

#### Q: 最近、ハリスコ州から米国へのアボカド輸出が可能になったことについてどう思うか?

ハスアボカドを輸出する生産者と梱包業者の団体は1997年に設立された。それは、米国がミチョアカン州からの輸出に国境を開いた時だった。この団体は、品質、トレーサビリティ、食品の安全性など多くのことを管理し、「アボカドズ・フロム・メキシコ」ブランドの販売力を強化するために設立された。

この団体は、メキシコの3万6千を超える生産者の80の梱包施設を代表している。数か月前までは、米国にアボカドを輸出していたのはミチョアカン州だけであった。しかし、今、アメリカはハリスコ州にも扉も開いた。対象となる梱包施設は、67からおよそ80となった。

当団体は基本的に、我々が世界のすべての販売先市場に輸出する果実が、最高の品質、最高の認証、最高のトレーサビリティ、食品としての安全性を有し、さらに固形成分の品質が確保されていることを保証する。ハリスコ州の観点は、もちろん、米国市場が開かれた今、輸出先となる新しい顧客が増えたということだ。

ハリスコ州は、以前は日本、カナダ、ヨーロッパに輸出していたが、現在は米国市場も開放されている。今年、すべてのことのバランスが取れ、ヨーロッパ、日本、

カナダなどの市場でも成長が続くと思う。

#### Q: メキシコではアボカドはどのように生産・出荷されているか?

メキシコは非常に特殊な国である。明らかなようにメキシコはアボカドの原産地である。アボカドは何百万年も前に現在のメキシコに当たる中央アメリカで生まれた。メキシコ、特にミチョアカン州は世界で唯一、アボカドが年に4回開花する地域である。

チリの生育シーズンは年1回、ペルーも1回、カリフォルニア州も1回である。ミチョアカン州では生育シーズンが4回ある。このため、我々のどこかの果樹園を訪れると、いつでも収穫可能な果実と、生育中の果実がある。4回の開花期がある。我々が一年中出荷できることは、他の産地との大変興味深い違いである。

#### Q: 世界の他の地域で市場を開かせる見通しはあるか?

コロナ禍は実際、我々の計画に非常に大きな打撃を与えた。コロナ禍の前は、中国、韓国、日本、カナダ、米国で販促活動を行っていた。しかし、コロナ禍の間は、物流、貨物運賃及び海上輸送の所要時間について、状況が非常に悪かった。現在は基本的に、米国、カナダ、日本の3つの市場にのみ焦点を当てている。しかし、将来的に中東、アジア、ヨーロッパの他の市場を開放させるというかなり良い見通しがある。

#### Q: メキシコのアボカド産業が直面している課題はどのようなものか?

私はそれを課題ではなく1つの強みと呼びたいが、我々が築いているのは持続可能性である。我々には



持続可能性に関する非常に重要な計画がある。

我々は、環境の持続可能性、人的資源、水の保全、森林再生に焦点を当てたみどりのアジェンダに協力するという国連との約束に署名した。我々は、我々の果実が持続可能であり、社会的責任を果たしており、当然のことながら安全に消費できることを確保する上で非常に強い力を持っている。

これは我々が検討のテーブルに置いている課題の1つであり、我々は単に味と品質が素晴らしく良いだけでなく、持続可能な果実を提供することを大変強く約束している。

## 2. ペルー ブルーベリーの輸出が新記録

EUROFRUIT (2023年3月10日)

ペルーは今シーズン、新記録となる28万7千トンのブルーベリーを輸出すると見込まれ、これは14億米ドルに相当し、ブルーベリーは輸出額において同国最大の輸出農産物となる。有機ブルーベリーの出荷量は史上最高の3万5千トンに達し、ブルーベリー総輸出量の12%を占めている。

ブルーベリーの出荷団体であるプロアラندانオス (Proarándanos) のルイス・ミゲル・ベガス事務局長は、今週リマで開催された第14回国際ブルーベリーセミナーで講演し、来シーズンの出荷量は30万トンを超えると確信していると述べた。

ベガス氏は、ヨーロッパでの供給過剰に起因する価格への圧力、生産コスト及び輸送コストの増加、さらに国内での政治的・社会的不安定により、難しいシーズンであったと述べた。同氏は、ペルーのブルーベリー生産量は今後も増加するので、これ以上の価格の低下を防ぐためには、業界として米国や中国などの主要市場での販売促進活動を拡大する必要があると指摘した。

また、同氏は「ペルーの有機栽培ブルーベリーの9%は米国に出荷されており、来シーズンは有機栽培がブルーベリーの総出荷量の15%を占めると予想している」と述べた。

ペルーは、20品種以上のブルーベリーを世界の30か国・地域以上の市場に輸出している。近年、ブルーベリーの出荷が増加するのに合わせ、関係当局は新しい市場の開拓に努めてきた。現在、インドネシア、日本、南アフリカ、韓国、ニュージーランド、ベトナム、アルゼンチン、ボリビア、ドミニカ共和国、エクアドル、オーストラリアの市場へのアクセスを獲得するための交渉が進行中である。

マウラ・マクスウェル

## 3. FAO 世界の2022年の熱帯果実輸出量は5%減少

FreshFruitPortal (2023年3月13日)

国連食糧農業機関 (FAO) の最近の報告書によると、2022年の世界の熱帯果実の輸出量は前年に比べて5%減少した。中でもマンゴー (マンゴスチン、グアバを含む)、パインアップル、アボカドは最も影響を受けた部類だが、対照的にパパイヤの世界合計輸出量は1%微増の37万トンと見込まれている。

世界のマンゴー、マンゴスチン、グアバの合計輸出量は5%減の210万トン、パインアップルの輸出量は1.5%減の320万トン、アボカドの輸出量は6%減の240万トンと見込まれる。一方価格に関しては、報告書は、上記の熱帯果実主要4品目の世界の平均輸出単価が、総じて強い上昇傾向を示しているとしている。

### 熱帯果実の生産に影響を与える外的要因

メキシコの主要産地における6月の暴風雨とその後の干ばつによる減収が、輸出量の減少の原因である可能性がある。報告書は他方、ペルー、チリ、ケニア、南アフリカなど他の主要生産国からの輸出は緩やかに増加したと見られるとしている。

メキシコ産パパイヤは逆の影響、すなわち、主に「栽培面積の拡大」による約4%の増加を示した。一方、高い航空運賃は、パパイヤのさらなる成長見通しの阻害要因として挙げられている。

ロシアのウクライナ侵攻は、これら両国の熱帯果実市場を混乱させた。それによる減少は、「世界の熱帯果実出荷量の2.4%が、2022年中に目的地の市場に到達する上でかなりの障害に直面したことを意味する。」

全体として、青果物の輸出量の減少は価格の上昇を伴った。報告書は、「アメリカ合衆国の平均指標卸売価格は、主な熱帯果実のほとんどで強い上昇傾向を示している」と記している。

しかし、価格の上昇はコストの上昇によって相殺された。報告書は、投入資材価格の大幅な上昇が同時に生産コストを大幅に上昇させたとして、「輸送コストの上昇と冷蔵コンテナの世界的な不足が相まって、2022年前半にはコストの上昇圧力が高まり、収益が圧迫されたが、これらの圧力の一部は後半には和らいだようだ」としている。投入コストの上昇は、主な熱帯果実生産国へのロシア製肥料の出荷の混乱の影響を受けた。

報告書は、「出荷、貿易、流通における熱帯果実の日持ちの悪い性質を踏まえると、環境上の課題と不十分なインフラは、熱帯果実の出荷と国際市場への供給を引き続き危険にさらしている」と記している。

## 4. 南アフリカ 政府が柑橘類セクターを支援

EUROFRUIT (2023年3月18日)

南アフリカのトコ・ディディザ農業・土地改革・農村開発大臣は、政府はベトナム、フィリピン、シンガポールとの多国間関係を通じてアジア市場へのアクセス拡大を推進し、同国の柑橘類部門を支援すると述べた。

東ケープ州ゲベール市 (旧名ポートエリザベス) で開催された柑橘類生産者協会 (CGA) の柑橘類サミットで講演したディディザ大臣はまた、柑橘類生産者が昨年、電力負荷削減 (計画停電) やEUへのオレンジ輸出を脅かすEUによる新たなフォールスコドリングモス (FCM (蛾の一種)) 規制の導入など、多くの課題に直面したことを承知していると述べた。

同大臣は、政府はベトナム、フィリピン、シンガポールとの関係を強化することで業界を支援することを約束しており、また停電が農業部門に与える影響を軽減するための解決策を見出すため、農業・土地改革・農村開発省の電力負荷削減対応タスクチームと緊密に協力し

**(公財) 中央果実協会****編集・発行所****公益財団法人 中央果実協会**

〒100-0011

東京都千代田区内幸町 1-2-1

日土地内幸町ビル 2階

電話 (03)6910-2922

FAX (03)6910-2923

**編集・発行人**

今井 良伸

**印刷・製本**

(有)曙光印刷



毎日くだもの 200 グラム運動

**当協会の web サイト**[www.japanfruit.jp](http://www.japanfruit.jp)

本誌についてのご質問、ご意見、お気づきの点がある場合、転載を希望する場合は、上記にご一報願います。

より一層有益な情報発信に努めて参ります。

本誌の翻訳責任は、(公財)中央果実協会にあり、翻訳に関して、

**FreshPlaza****FreshFruitPortal****Good Fruit Grower****EUROFRUIT**

は一切の責任を負いません。

ていると述べた。

南アフリカでは今年、電力供給網に前例のない混乱が見られ、果実輸出産業は全般的に深刻な影響を受けている。

将来世界の市場で柑橘類の出荷量を増加させ、物流上の問題を克服する能力は、これまで大きな課題として強調されてきた。業界はまた、彼らを支援するのは政府の重要な役割であると強調してきた。

予想されたとおり、柑橘類生産者らは2023年の出荷シーズン中のFCM規制の影響について議論するのに多くの時間を費やしたが、CGAは、この規制により今年生産者に生じる追加の費用と収入の損失が5億ランド(約36億円)以上となる可能性があるとしている。

柑橘類の輸出量は今後10年間、毎年1千万箱増加し、2032年までに2億6千万箱に達すると予想されており、CGAサミットは、増加する生産量を主要な輸出市場に出荷して吸収させるための探求すべき機会と克服すべき課題に焦点を当てた。

CGAは声明で、「米国、欧州連合、タイ、韓国、インド、日本、ベトナム、フィリピン、タイについて、今後数年間の市場アクセスの優先度を上げることが確認された。柑橘類に対する世界的な需要の高まりという文脈における持続可能性とエネルギー問題からの回復力についても議論された」としている。

ジャスティン・チャドウィック最高経営責任者(CEO)は生産者らに対し、サミットの目的は将来の成長に向けた計画を策定するだけでなく、CGAの包括的な成長計画を展開するための機会と展望を共に探求することでもある、この成長計画は特に黒人の生産者に力を与えるものだと言った。

フレッド・マインチェス

**5. ニュージーランド アジア市場に向かう今シーズンのリンゴ**

FreshPlaza(2023年3月28日)

ニュージーランドは今シーズンのリンゴの収穫期であり、T&Gグローバル社のリンゴ品種の最初の荷がベトナム、香港、マレーシア、台湾、インドネシア、タイの消費者と取引先に輸出されている。

早生品種であるポッピ™とロイヤルガラに始まり、パシフィッククイーン及びT&G社が権利を有するプレミアムブランドのジャズ™、エンヴィー™が続き、同社の果樹園チームと契約生産者らは、ホークスベイ、ギズボーン、ネルソン、セントラルオタゴの各地域のリンゴの収穫に忙しい。

T&G社の事業部長であるクレイグ・ベティ氏は、2月にサイクロンガブリエルが北島の一部に大きな影響を与えたにもかかわらず、樹上には多くの果実があると言う。同氏は「ホークスベイとギズボーンの一部の果樹園は影響を受けたが、それらの地域にも無傷の果樹園がある。すでに収穫してアジアの取引先に出荷した果実は大変良いようだ。3月から4月に収穫される残りの果実については、弊社のプレミアムブランドのリンゴが今後数週間で良好に色付き適度なサイズに育つのが楽しみだ」と述べた。(以下「」は同氏の発言)

「サイクロンは南島を完全に迂回し、暑い夏の後、ジャズ™とエンヴィー™のブランドリンゴが良好に成熟し、着色している。世界中のリンゴ好きが今シーズンの新しい収穫物を楽しみにしており、例年どおり、我々は最高のリンゴを作るために園芸の深い専門知識を適用し、丁寧な園地管理と収穫後管理を実施している。素晴らしい色付き、酸味または甘味、満足のいく食感、あるいは小さなスナック用や大きなギフト用のリンゴなど、人々が何を求めているにせよ、弊社のプレミアムブランドの品揃えの中から誰にでも何かを提供できる。」

「弊社はまもなく、ホークスベイに新しい最先端の自動化された梱包施設を立ち上げる。この南半球で最大級の梱包施設により、弊社は今シーズンも将来的にも、地域の収穫物から最高の品質を引き出し、国内と世界60以上の市場の消費者に、素晴らしい味わいの弊社のプレミアムリンゴを楽しんでもらうことができる。」